

特別企画 「教育対談 フィロソφοςー『学』に生きる人たちへ」

Philosophos

Scuola di Atene

アテナイの学堂にて

聞き手: 奈良 順子

「空間と人生をデザインする」

‘Designing Space and Life’

本日のゲスト講師



山口深雪さん / Ms. Miyuki Yamaguchi

ミユキ・ヤマグチ・デザイン・スタジオ 代表

(Principal / Miyuki Yamaguchi Design Studio)

カリフォルニア大学バークレー校エクステンションスクール講師

旧スカイビジネススクール 第一期卒業生

今回の「フィロソフォス」は奈良潤博士の代わりに、私、奈良順子がインタビュアーを務めさせていただきます。本日は、スカイビジネスにとって、非常に重要で、素敵なゲスト講師をお招きします。旧スカイビジネススクール第一期卒業生の山口深雪さんです！

山口さんは、高校生のころ英語を習得するために旧スカイビジネススクールに入学されました。東京都世田谷区出身、目黒区碑文谷にあるトキワ松学園高等学校卒業後、名門カリフォルニア大学バークレー校建築学部を大変に優秀な成績でご卒業。

その後、アメリカの大手建築デザイン会社である Gensler 社そして Brayton Hughes Design Studios 社等でインテリアデザイナーとしての経験とキャリアを積まれました。手がけられた主なプロジェクトとして、Four Seasons Hotels & Resorts、Fairmont Hotels & Resorts、Lucasfilm、IBM、Chase Bank などの大手ホテルや銀行などがあります。個人の住宅のデザインもされています。アメリカのインテリアデザイン界で権威のある団体 IIDA や著名インテリア雑誌社 Boutique Design、Lodging & Hospitality Design より、山口さんが担当されたいくつかのプロジェクトに対して、デザイン優秀賞が送られています。ここ最近も、全米で人気ある Traditional Home という雑誌社主催の Napa Valley でのショーケースに招待され参加し、大きな話題となっています。また、UC Berkeley Extension (カリフォルニア大学バークレー校エクステンション / 注: 大学付属の社会人講座) で講師も務められています。

山口さんは現在、カリフォルニアにお住まいで、ご家族は、ご主人のイズミさん、名門ペンシルバニア大学に在籍中の息子さん、中学一年生の娘さんの四人家族です。

さて今回は、山口先生にご自身の過去を振り返っていただき、スカイでの思い出や学んだこと、学生時代の勉強、インテリアデザイナーとしての仕事、子育て、日系人女性がアメリカという競争社会で生きる厳しさ、などについてお話を伺いたいと思います。また、競争社会の中で進路などが多い中、山口先生から「新しい生き方」のコツを教わりたいと思います！

スカイビジネススクールで学んだこと

ー山口先生、やっぱり、いつものように「深雪さん」とよばせてください。今日は、私たちのフィロソフォスに登場して下さってありがとうございます！深雪さんは、高校生の時にスカイに入会されたわけだけど、スカイは生徒さん3人からはじめた寺小屋でした。深雪さんはその3人のうちのお一人でしたね。本当に優秀な生徒さんでした。よく覚えていますよ！まずは、スカイでの思い出を話して下さいませんか。

山口:今回はお招きありがとうございます。先生との対談を楽しみにしておりました。私のスカイでの思い出は、とにかく楽しかった事です。学校の帰りに1時間以上かけて電車で通いましたが、全然苦では無かったです。先生のご自宅だったのでアットホーム的でリラックスした環境の中、少しは緊張しながらも、とても楽しみながら受けた英語のレッスンでした。

—深雪さんは当時高校生だったのですが、感性豊かな、それでいて何でもきちんとこなす頑張り屋さんでした。そうでしたね。高校の帰りに往復3時間もかけて、お教室に通ってこられたんですよ！スカイでのレッスンもそれなりに厳しかったと思うけど、英語以外にどんなことを学びましたか。それがご自身の後々の人生に活かされていると思いますか。

山口:私は、留学する為の英語のレッスンを受けていましたが、航空会社を目指されている他の生徒さんと先生とのお話や、授業中に先生のスチュワーデス時代の体験談をうかがい、「あー、働く時の心構えとかマナーとはそういうものなのか」、と働くことについて、初めて知る機会でした。例えば、当たり前のことかもしれませんが、ビジネスのアポイントメントには絶対に遅れていけないとか、授業中あるいはその時やその場で100%集中して、習っていることや行っていることをマスターする、等です。先生がハワイでトレーニング期間中、出来る限りの時間ビーチで遊びたいが為に、受講中にその場で習っていることを全て覚えて、後で勉強せずにすませ、思う存分ビーチで遊ばれたというお話をよく覚えています。なるほど、全ては集中力か！と、悟りました。

—すごいですネ！たった十代で、そんなことを読み取るなんて。それこそ「集中力」です。自分を鍛えるって、たとえくだらないと思うようなことでも、どんなことにも集中力の積み重ねなのかな、と最近特にそう思うんです。スカイの始まりは、生徒3人で、しかも希望する進路もバラバラでした。思い返すと、留学希望の深雪さんが、FA希望の社会人の人と一緒に勉強してました。普通だったら、FAの話なんて関係ないワ、と思うところを、深雪さんは逆に血肉にしていっただのですね。集中力があつたから出来たのですね。集中力って日々の生活の一瞬一瞬の積み重ね。もちろん、何も考えないリラックスタイムも必要ですけど。

アメリカでの学生時代

—そうして、日本を出発しアメリカへの留学を果たしました！最終的に、名門カリフォルニア大学バークレー校を卒業しました。やはり当初は、英語とか専攻の勉強など大変だったと思います。どうやって乗り切ったのですか？

山口: 日本の学校では、英語の成績が良かったので、自信はあったのですが、それでも先ず大学へ行き始める前に、アメリカで住み始め、いざお店に買い物に行った時、戸惑いました。「これはいくらですか?」とか、「私はこれを買います。」と英語で言うのは分かっていても、買い終わった直後に、お店の人が“Thank you.”と言ってきて、果たして私はなんと答えれば良いのか? 日本語だったら、「どうも。」(これ、とっても便利な日本の言葉です)で済むけれど、「どうも」は英語だと何だろう? と、迷ってしまっ。当初は、日本語で考えて、その英語直訳を考えて話そうとしていたので、「どうも」を英語に訳すのは無理でした。その時、英語は出来たはずの私でも、急にすごく不安になりました。

外国人学生用の英語集中講座を終えた後、正規の大学での勉強はやはり大変でした。最初の学期にとったアメリカ史のクラスは、講義聴いても、もちろんチンプンカンプン。頭の良さそうな子に頼んで、その子のとったノートを毎授業後借りて、自分のノートに手書きで写して、全ての文章を一文字ももらさずに丸暗記しました。

バークレーでの建築の授業は、自分でデザインしてモデルを造って楽しかったのですが、建築史や専攻以外でとらなければならない社会学とかが、大変でした。大きな講堂の最前列に座って、テープレコーダーで早口な教授の講義を録音し、家に帰って、何度もなんども聞きなおしました。でも、アメリカ人にとっても大学での勉強は大変みたいで、ある日ふと気がついたら、地元のアメリカ人もテープレコーダー持参して私の横に座っていました。丁度、お昼時の講義だったので、テープレコーダーを片手に、もう一方の手でサンドイッチをかかえて食べていたのが、アメリカ人らしいと思いました。さすがに日本人の私は、「授業中に教授の目の前でお昼を食べちゃ、失礼。」と思うのですが、その点、アメリカの生徒も先生も気にしないのが、面白いと思いました。まあ、これは余談ですが。とにかく、こんな具合に色々工夫して、なんとか卒業にたどりつくことが出来ました。

一私もそうでした(笑)。19歳になったばかりの頃で、最初に入社した航空会社がパンナムだったので、急に渡米することになったのです。何しろ早口でしゃべる人が多いなと感じました。環境もがらりと変わり、習慣も全て違うと思ったし、そのことで頭が真っ白になり余計に相手が何を言っているのか理解できず戸惑いました。ところで、どうして、建築学を専攻されたのでしょうか? 大学在学中から、将来はインテリアデザイナーになる、って決意されていたのですか?

山口: アメリカの大学の良い点は、大学に入ってから専攻を選ぶことが出来たり、専攻を途中で変えたり出来たりすることです。建築学なんて、日本の高校卒業の頃、思ってもいませんでした。専攻は3年生になる前に決める必要がありますが、何にしようか考えていて、丁度その頃に一つとった建築学のクラスが面白くて興味がさらにあったこと、建築学

は色々な分野に関連していること。例えば、デザインセンスは勿論大切だけれど、数学、物理学、心理学、社会学など、幅広い知識や経験をもつのが、建築を勉強するのに役立ち、それが自分に合っていると判断した理由からです。あと、単純な理由は、建築専攻している学生が格好良く見えて、自分もその一人になりたかったと言う、イメージ願望もありました。とてもミーハー的な私です。でも、実際、建築学の学生は皆、面白いし、デザインプロジェクトも楽しいのみでした。自分に合っていたと思います。ただし、同じ建築学を勉強するのでも“外”から見る建物よりも、人がどのように建物の“中”で暮らして、働いて生きていくか、インテリアの方に興味があり、卒業後はインテリアデザイナーになりたいと思っていました。

一なるほど、インテリアデザインの世界って興味深いですね！



カリフォルニア大学バークレー校建築学部を優秀な成績でご卒業！

アメリカのデザイン業界で生きる

一どの業界にいても、特にアメリカの場合、競争が激しく、生き残るのは大変なことだと思うのですが、まず、大学を卒業してからどのように活躍の場を見つけ、キャリアを積んでいったのでしょうか？

山口：卒業当時、建築デザイン業界は大変不景気で、仕事を見つけること自体が大変でした。同じ大学を卒業した仲間のなかでも、職探しを断念してバックパックでしばらくヨーロッパ一周旅行に出かけたり、建築家の道は早くも断念してレストランのシェフになろうとしたり、まともに職を探せた人は多くなかったと覚えています。そんな時、サンフランシスコ市内にあるインテリアデザイン会社をリストアップして、アポイントもとらずに、「自分は

学卒業したばかりで、ぜひここで働きたい。」とポートフォリオを持って歩いて、一軒いつけんオフィスのドアをたたきました。勇気があったというか、必死だったというか、若かったから出来たことです。運よく、3 - 4軒目で就職が決まりました。それからは、同じインテリア業界でも、自分の学びたいことや伸ばしたい能力をさらに活かせるデザイン会社に移っていきました。ホスピタリティーのプロジェクト経験をもっと持ちたい、とかアメリカのデザイン会社でナンバーワンにランキングされている会社で自分の能力を試してみたいと言う理由から、数社のデザイン会社で経験を積みました。デザインディレクターとか、副社長のタイトルももらい、自分のキャリアのプラスになったと思います。

一すごいことです。建築学部を卒業しても、その道を諦めてしまう人たちも出てきている不況の時代に、自分の作品を持って、しかもアポなしで自分を売り込みにいくなんて。それに日本女性ですものね。それにも増して、すごいことは、そうした深雪さんの熱意と才能を認めてくれた会社があったということです。そうしてキャリアを積んでいったのですね。

山口:初めて手にしたインテリアデザイナーの仕事、嬉しかったです。勿論、初任給なんてすごく少なかったけれど、自分のしたい事をして、しかもお金がもらえるなんて最高でした。最初に私を雇ってくれた人への、ご恩は忘れられません。



オフィスで。インテリアデザイナーとして駆け出しの頃の深雪さん。

一私たち日本人にとって、アメリカの建築デザイン業界は縁遠い存在でもあります。簡単にお仕事の内容とかお話していただけますか。具体的に、どういう手順で仕事を進めるの

かしら？

山口：私のやってきたプロジェクトの種類は、オフィスや銀行、ホテル、コンファレンスセンター、そして個人の家と様々です。どのプロジェクトもケースバイケースですが、オーナーのクライアントさん、建築家、そしてコントラクター等のチーム構成で、建物のデザインや周辺の環境条件、オーナーの望むイメージに合った内装のデザインをします。時には、デザイナーとして、プロジェクトに適切なコンセプトを固めることもあります。スペースプランや天井・壁・床のインテリア全てのデザイン、そして仕上げ材や家具選び等もサンプルやスケッチとともにまとめてプレゼンします。変更リクエストがあれば、再選択やスケッチのやり直しもします。デザインコンセプトを全うしながら、プロジェクトの予算やスケジュールに合わせ、図面書類や仕上げ材、家具仕様書等の作成提出、コントラクターとも建設現場で工事の確認もすれば、オーナーさんの家具購入のお手伝いもします。デザインが綺麗なだけではなく、もちろん建築や防火法規に合っていること、公共の安全性、または身体障害者用にも適切なアクセスがあるか、エコに良いかどうか等の多種多様のチェック点をクリアしていきます。新築や改築のビル工事が終わり、家具やアートがインストールされて、プロジェクト完成となります。その時に、クライアントさんの喜ぶ笑顔を見るのが、いつも何より嬉しいことです。

一なるほど。どんな仕事もそうだと思うのですが、最後行き着くところ、すなわち、究極は「人」、「人々」なんですね。そうしたことに喜びを感じている深雪さんなのですが、お仕事で一番難しい、または気を最も配らなくてはならない点とは何でしょうか？

山口：インテリアの仕事はデザインすることは勿論ですが、やはりサービス業です。クライアントさんが満足してくれるのが一番の喜びです。また、プロジェクトを成功させるのに、一番大切なのは、チームワークのスピリットを最後まで高く維持することだと思います。問題点は必ず幾つか生じますが、それらをチームとして一緒に解決していき、お互いに助け合って譲り合って楽しんでプロジェクトを全うするのが、最高だと思います。

一深雪さんの創造性、クリエイティビティの根源は何なのでしょう？ 深雪さんの素晴らしいアイデアをどのように作品に導いていかれるのですか？

山口：クリエイティビティーは、毎日の暮らしからのメモリーが根源になっていると思います。自分の五感センスが常にフルに働いている状態で、プロジェクトのことを考えている時に、自分の頭の中にあつた知識、思い出、考えをプロセスして、そのプロジェクトに適切なアイデアが明確になってきます。そのアイデアをスケッチしたりサンプルを集めたりして、作品化させていきます。

—私は、建築やデザインのことはまったくの素人なのですが、深雪さんの作品は大好きです。雄大であり繊細で、温かく、気品があるように見えます。



HP サイト www.miyukiyamaguchi.com で、その他の作品写真もご覧いただけます。

—日々お忙しい深雪さんなのですが、特に、これから手がけていきたい作品、またはお仕事はありますか？

山口:これからは、ライフスタイルを向上させるようなプロジェクトを、特に中心にしていきたいです。私のデザインで、人々の毎日の生活を豊かにするお手伝いが出来れば、嬉しいです。今までのオフィスや銀行などのプロジェクトでも、人が働きやすい仕事場や使いやすい銀行作りを目指して、ライフスタイル向上につながっていたとは思いますが、住居やダイニング、フィットネス、リラクセーション等のもっと住むことや癒すことをテーマに、人間の生きる向上につながるプロジェクトに力をいれていきたいと考えています。また、つい最近独立して、自分のデザイン会社をかまえた今、自分でとことん納得しうるサービスや仕事の仕方が出来るので、とても嬉しく思っています。

母として、子供たちに伝えたいこと

—深雪さんとご主人のイズミさんには二人の優秀なお子さんたちがいますね。勉強がよく出来るお子さんに育て上げたいのは、世のお母さん方の常だと思いますが(笑)、深雪さんはどのようにお子さんたちに接しているのですか。やはり、学校の成績に厳しい「教育ママ」ですか(笑)？

山口: 学校の勉強は本人に任せています。成績は、その勉強具合の結果なので、悪ければ、「あー、本人わかっていないのか、怠けているのか?」と、一応話はします。上の子には、「一生涯、学ぶ楽しみを学ぶ」が、モットーの中学と高校に通わせました。下の子は、「全て自分で責任を持つことを学ぶ」がモットーの中学校に行かせています。二人がどのように違って育つか、同じように育つか、将来が楽しみです。教育ママではないと思いますが、成績が悪ければ、分からない部分を一緒に見直そう、とは思っています。

一学業も大切だと思うのですが、お二人のお子さんのこれからの長い人生において、何を最も大切にしてほしいと思いますか。そのことについてご主人はどのように仰っているのでしょうか。

山口: 自分で好きなこと、やりたいことを見だし、その自分の夢や目標に向かって前進し、自立して生きていければ、何よりです。主人もそう同意しています。

女性たち、そして、他のスカイ卒業生や在校生たちへ

一深雪さんのように、人種的にマイノリティーである日本人女性がアメリカという競争社会で勝ち上がっていくことは本当に大変だと思います。深雪さんは、その成功例だと言えると思います。しかしその一方で、社会の中で才能を発揮できなかったり、シングル・マザーのように生活に苦しんでいる女性も多いのです。こうして大変な思いをされている女性たちが元気になれるように、なにかメッセージをお願いします。



同僚たちとこれから出張。

山口:とても私は、競争社会で勝ち上がっているとか、成功しているとか考えずに、自分の道を自分なりに自分のペースで生きてきただけと、思っています。今でも、時々落ち込んだり悩んだりすることがあって、頑張るしかない！と自分に言い聞かせることがあります。一見、成功してバリバリやっている人の様に見えても、人には言えない見えない苦しみがあるかもしれません。プリンセス・ダイアナがまさにそうでしたよね。

一年月が経つのははやいですね。深雪さんには、何千人ものスカイビジネススクールの後輩がいます。彼女、彼らの多くはエアライン業界で活躍しているのですが、その後、転職したり、他の業種で頑張っている人たちもいます。仕事を止めて専業主婦をして子育て真っ最中の人たちもいます。様々な人生を歩んでいるのですが、スカイビジネスの現受講者の皆さんのことも含め、なにかメッセージはありますか？

山口:皆さんが、ひとそれぞれの道を歩んでいかれる、好きなことを全うされる、のは、大変なことですが、立派なことです。専業主婦も立派なお仕事です。子育てこそ大変で、次の世代を育成していく世の中で最も大切な仕事だと思います。最近ヒョンなことから youtube で発見した、Will Smith のビデオがあります。彼が自分の成功についてインタビューに答えているのですが、“You decide ”。とにかく自分でこれをやるんだ！と決心した時点で、自分でやるべき行動が決まり、その道が開かれていったと言っていました。最もそのとおりだと思います。それでも、人生難しいです。もしもご自分一人で悩みこんでしまったり、追いつまったりされた場合、そういう時にこそ、順子先生にご相談なさるべきだと思います。恩師を訪れると、自分の初心に戻れる機会をもつことですし、順子先生は、なんと言っても私達のライフコーチ的存在の方ですから。

—そう言って頂いて嬉しく思います。私自身も含めてなのですが、人は一人では生きていけないですね。歩む人生の中で、何でも話せたり、励まし合える人に出会えることは最大の財産だと思います。私も、小・中・高と、また大学でも恩師に出会うことができました。それから父と母の存在にも感謝してます。そして、心から話し合える数十年来の親友にも出会うことが出来、苦しい時に支えられました。また、深雪さんをはじめ多くの素晴らしいスカイの卒業生との出会いで、反対に自分は育てられたような気がするのです。私こそ、お礼を言わせて下さい。

自分の人生をデザインする

—最後になりますが、高校卒業以来、平均的な日本人女性とは違う生き方をされてきました。深雪さんは、インテリアデザイナーとして空間だけでなく、ご自身の人生そのもの

もデザインされてきたようにも思えます。そうすることは才能も必要ですが、同じくらいに勇気がいることだと思うのです。そのことについては、どうお考えですか。

山口: あー、そういう風には考えたことはありませんでした。なんだかとても洒落た響きがありますね、空間だけでなく人生もデザインしてきたなんて。確かにレールに乗った人生ではなく、日本の高校を卒業して以来、留学、結婚、就職、30歳の時に息子出産、40歳で娘出産と、おっしゃるとおり、平均日本女性とは違う生き方をしているかもしれません。これも先生をはじめ、両親や主人の支えがあってからこそできたんだと思います。人間一人では生きていけません。お互いに関わり合って助けあってからこそ、生きていけるんだと思います。先程、触れた Will Smith じゃないですけど、人生は一度決意したら、そのまま進むのみなんだと思います。



深雪さんがデザインされた、ナパショーケースサイドポーチ

ー深雪さん、今日は感動しました。素晴らしい仕事観、人生観をお持ちですね！もっとうすごいことは、異国の地で日本女性がそうやって人生を切り開いてきたということです。習慣も、言語も違う土地で前向きに生き抜いている深雪さん。目の前の山を一つひとつ乗り越えてきました。なんて素晴らしいことかと思います。私は、スカイ卒業一期生(3人だけでしたが)としての深雪さんを心から誇りに思えます。嬉しいです。今日はお忙しい中、貴重なお時間を割いてくれてありがとうございます。

山口: こちらこそ、ありがとうございました。



ミユキ・ヤマグチ・デザイン・スタジオ

www.miyukiyamaguchi.com

(お問い合わせは日本語でどうぞ)

写真提供: 山口深雪さん

ヘッドショット写真: Suzanne Becker Bronk

プロジェクト写真: David Ducan Livingston & Patricia Chang

ご感想は、こちらまで。

skybusinessjpn@gmail.com